

報告①

(特集) 各地の高校魅力化プロジェクトを紹介 吉賀高校の高校魅力化(1)

第19代校長齋藤雅典先生(2013年度〜2015年度)の語り

——最初は、やること自体が目的——

日本女子大学 樋田有一郎

第一九代校長の齋藤雅典先生(二〇一三年度―二〇一五年度)へのインタビューは二〇二〇年二月一四日に、吉賀高校の応接室で行われた。二〇二〇年度当時は非常勤で、吉賀高校で数学を教えていた。齋藤先生の前任校は津和野高校(二〇一一年度―二〇二二年度)であり、高校魅力化の高校から高校魅力化の高校への異動であった。二〇一三年度は吉賀高校の魅力化の三年目に当たり、第二〇代の熊谷修山校長が教頭として魅力化を推進している時期であった。

当時の吉賀高校は廃校回避が重要な課題であり、廃校回避への取り組みとして学力、中高一貫、生徒指導、生徒の自信回復、キャリア教育そしてそれらすべてに関連するものとして高校魅力化に取り組んでいた。齋藤校長は様々な人の支援を得て、様々なことに取り組んだ。「吉賀高校は走り続けなければ倒れる」と言うインタビューの言葉に齋

藤校長の決意の強さがうかがえる。

『地域人材育成研究会』にとっては、今日の高大協働探究活動(吉賀高校のアントレプレナーシップ教育の一部)につながる吉賀高校と青山学院大学・法政大学の学生の交流の提案をいただいたという意味で、齋藤校長先生との出会いは大きな出来事であった。高大協働探究活動は手探りで始まったが、齋藤校長の人を引きつけ・受け入れる包容力や高校生だけでなく高校魅力化に関わる者への学びの効果への信念が、高校生だけでなく高校魅力化に関わる者への学びの効果を成長させ、成長させ、大学教授同士の関係を成長させた。

吉賀町内でも様々なところで様々な成長が起きているが、吉賀町内に様々なエネルギーがあったことと齋藤校長の高校魅力化への姿勢が影響した結果といえるのではないか。

◇ 吉賀高校は二〇一三年時点で島根県内に四校しかない一学年二学級以下の普通科小規模校のうちの一枚であった。そして、前任校長は町内の中学生の人数を元に廃校の危機のシナリオを描き、様々な募集対策を行っていた。しかし、町内では吉賀高校存続への機運は高くなかった。

「何とかしないと吉賀高校がなくなる」、高校がなくなつたときの地域のマイナス点をいろいろと指摘して、「何とかしなきゃいけない」と言われる方もおられました。でも、その頃はそういう人は少数派かな、と私は受け止めました。

一年目の年に、町議会の委員会に呼ばれて説明をさせてもらったことがあるんです。その時も、どちらかというと、理解者よりも、「そんなことを言われても難しいですよ」という考えの方が多いように感じました。」(インタビューより引用。以下同じ)

◇ しかし、吉賀高校の場合、前任の太田校長のとき以来、関係者の廃校の危機意識は強かった。このことが島根県の「離島・中山間地域高校魅力化・活性化事業」への参加を促した。

「県教委の魅力化補助金は、魅力化できなかったときの手切れ金ではないか」というようなことは、当然、意識していました。だから危機感を持っていました。魅力化事業の対象校に、遅れて参加した高校がありますよね。……そういう不審な気持ちがあつて、すぐには「参加します」ということにならなかつたんじゃないかと思うんです。吉賀高校もですし、……「とにかく、不安はあるけれども、お金を出していただけるといことは、とてもありがたい

たいことだから、魅力化に向かってやってみよう」と始まつたんです。」

◇ 新しい取り組みを導入するに当たって、齋藤校長は従来の教育目標と魅力化の教育目標の調整をしたという意識はないと述べた。それ以前の問題として「高校の存在価値をアピールするために」、「とにかく、良いことは何でも」やろうとしたのとのことであった。

当時、アクティブラーニングということが言われていて、知識の詰め込みではない教育が必要なんだという動きがありました。吉賀高校の魅力化でやり始めている、地域へ出かけていっているいろいろなことを学び、そこで考えたことを発表する、プレゼンテーションする、といったことは、高校教育の目標から外れているという意識はありませんでした。

吉賀高校の生徒の多くは、学力はそれほど高くなく、学習意欲も高くはないので、この魅力化の動きを通して、学習動機が生まれて、学習意欲が高まるとよいという思いでおりました。でも、そんなに簡単な話ではないですね。一番は、「この高校がなくなるんじゃないか」という思いです。……普通に考えると、まず、一学年一学級の吉賀高校がなくなると思えます。その思いがあつたので、……「従来のことややってきて、それに限界があるから新しい方向を」というよりも、とにかく、良いことは何でもやって、吉賀高校の存在価値をアピールしなくては、という思いでした。



◇ 高校魅力化の取り組みのモデルとなったのは、隠岐島前高校と飯南高校であった。そして、「自転車操業的な意識」、「走り続けなければ倒れる」という状況がおちついたときに目指した生徒像は学ぶ意欲のある自己肯定感の高い生徒であった。高校教育にとって基本ともいえることであり、令和三年の中教審答申が抱いた問題意識でもある（文部科学省『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申））。

最初は、「やること自体が目的」「意欲的に見えることをとにかくやろう」で始まったんですけど、いつまでもそれで続くはずがないので、「次は、それが学ぶ意欲につながるような仕組みを作らなきゃいけない、総合学習でいろいろな地域と連携した学習したことが、教科の学習意欲につながるようにしなきゃいけないではないか」と、私は思っていました。先生方も、そういうことは意識されていたと思います。」

荒れていた時代というのは、生徒たちは、自分たちは地域から「吉高生は、勉強ができん、やれん子だ」と見られていると思っていたんじゃないでしょうか。それが、魅力化の取り組みの中で、地域に出かけて地域の人の前で発表し、新聞にも取り上げてもらうなど、注目してもらえるようになったんですね。生徒は地域に出かけたとき、決してひどいことをいわれることはなくて、むしろ、褒めていただくことが多いのです。そうしたことから、自己肯定感が高まっていったと思います。

◇ 吉賀高校は中高一貫（連携型）を募集対策の柱としてきた経緯が

あり、二〇二二年度の高校魅力化の取り組みでも様々な中高連携のイベントが行われた。翌年以降も様々な連携のための事業やイベントを連携の形式で行っている。しかし、齋藤校長が着任した二〇一三年度の高校魅力化の取り組みでは、今日のアントレプレナーシップ教育に発展することになる「聞き書き」と「地域クラブ」が大きな柱となっていた。

「今も続いているアントレプレナーシップ教育は、その年が初めてです。吉賀町の活性化のためにどんなことをしたらよいかというのを、地域に出かけて学び、活性化策を考え、プレゼンテーションするというものです。途中、何度か地域の方に来ていただいて、指導してもらいました。

「去年聞き書きをやったから、今年も同じようにやるんだというような気持ちでは、こういう形の授業は駄目になる」と考えていました。……「ある学年のときには、進学を目指す子にもつながるような内容にしたいという申し出がありました。つながるといふのは、受験勉強という意味じゃないです。例えば、将来看護師になる希望の生徒は、医療機関に出かけて、いろいろな問題を聞くというふうなことです。

それと、大きなことは、東京研修の中身の変更です。はじめは東京で東大を見るプログラムがあったのです。私も着任の年に東大へ行ったのですが、「ちょっとどうかな」という思いをもっていったところ、樋田先生にお目にかかり、学生さんにお互いの生活を紹介し合ったり青山学院大学を案内していただいたりする形に変えていただきました。次の年からは、学生さんに生徒の発表を

聞いていただき、そのことについて話し合うというようになりました。いいものになって、本当に感謝しています。

◇ この吉賀高校生と大学生の交流はその後、法政大学生も参加するようになり、さらに、大学生と高校生がただ話し合うだけでなく、相互に訪問し吉賀町と東京で一緒にフィールドワークを行う企画へと発展している。なお、「今年も同じように」はしないという伝統がいつの間にかできあがっており、毎年いろいろなことが起き、大人たちはその都度、それまでは見ることのなかった高校生や大学生の姿と出合い興奮することになる。

この魅力化に関することは、とても。私は、教員生活の最後に、津和野高校と吉賀高校に勤めさせてもらって、とつても良かったと思っています。勉強になりました、本当に。「学校がなくなるかどうか」という状況なので、「じゃあ、学校の役割は何だろうか」、「本当になくなったら困るのか」とか、「この状況で、学校は何をしなきゃいけないのか」とか、続くのが前提の学校とはちよつと違うことを、いろいろと考えさせてもらったことが、とても良かったです」

「私は、進学校も良かったです。進学校は、受験を目標にしたとは言いませんけど、結局、進学実績を求められているところがあるので、模擬試験の成績を気にします。また、クラス間で進度をそろえて授業をしますので、「この子まだわかつたらんのじゃないかな」と思いながらも、先へ進まなきゃいけないです。

ここでは、そういった世界とは全然違って、「この子のためにどうしたらええか」に集中することができます。また、人数が少ないので、たったこれだけしかいない子どもを、「わかっているけどこの子はええわ」とか、そんなことはあり得ないですね。これが、一クラス四〇人おれば、授業中下を向いたりする子がいて、「あの子、集中してないな」と思っても、それを全部気にしていたら、いつもそういう子を気にかけてやっていたら、授業ができないです。それで、いつの間にかそういうことに慣れっこになって、自分がつまらん授業、話をしとつても、「あの子は集中力がないな」、「あの子、勉強せんな」という感じで過ごしてきた部分がいぶんあったという感じを覚えます。しかし、吉賀高校で魅力化に取り組む中で、もう一回考え直すことが多かったんです。」



1 着任した頃の吉賀高校の概要と魅力化（地域協働）の概要

——それでは、先生が吉賀高校に着任した二〇一三年頃のことを伺いたいんですけども。高校魅力化をめぐる地域の状況はどんなだったでしょうか？

齋藤・吉賀高校は、人口が多い時代にできた高校です。その頃は、「成績上位の人は津和野か益田の高校に行きなさい。そうしないと成績下位の子が入れる学校がないから。」という声があったようです。ス

タートがそうですから、子どもたちも荒れていた時期があったと聞いています。

ですから、私が着任した頃、地域の方に、「そりゃ地元の学校だから、校長先生は吉賀高校に来させてくれって言うけど、でも、あそこにはあ行かせられんよ」と言われる方もおられました。一方で、「何とかしないと吉賀高校がなくなる」、高校がなくなつたときの地域のマイナス点をいろいろと指摘して、「何とかしなきゃいけない」と言われる方もおられました。でも、その頃はそういう人は少数派かな、と私は受け止めました。

一年目の年に、町議会の委員会に呼ばれて説明をさせてもらったことがあるんです。その時も、どちらかというと、理解者よりも、「そんなことを言われても難しいですよ」という考えの方が多いように感じました。

——当時の高校の様子と、それから、生徒さんの様子はどんなだったでしょうか？

齋藤・私が来た年の二年生から、今もやっているキャリア教育（アントレプレナーシップ教育）が始まりました。東京研修もその二年生が初めてです。

前任の校長から、生徒の様子は、「荒れていた時期から見ると、ここ数年はずいぶん落ち着いて、おとなしくて、やるべきことをきちっと素直にやれるようになった」と聞いてきました。しかし、二年生の学年に、たまたま指導の難しい子がたくさん集まってしまいました。小さい学校ですから、影響は大きかったです。

ひねくれて、反社会的とか、そういうことではありません。我慢できない、また、周囲に対する思慮深さがない、そうしたことから、平気でいろんなことをしてしまうということがありました。魅力化とは別のことですが、生徒指導面では多くの教員が苦勞をしたんですね。落ち着いて授業がうまくできないという状況も、ちらほらあったですね。

——先生、二〇一三年度からこちらですよ？

その二年生というのは、(一年生だった二〇二二年度に)東京研修を始めた最初の？

齋藤…そうですね、魅力化の最初の学年。三年生は、「自分たちの下の学年からいろんなことが始まって、自分たちには何もなかった」っていうふうに言っていましたよね。

——それで、先生がこちらにいらつしたときが高校魅力化の三年目で、二年目には、私たちが聞いているのは、聞き書きしていたと覚えていません。先生が赴任された当時は、高校魅力化とはどのようなものであると捉えて、どういう組織で、どういうことをなさっていましたでしょうか？

齋藤…もう当時から、今も続いている、町の教育委員会と月に一回の魅力化プロジェクト会が始まっておりました(二〇二一(平成三三年一〇月開始)。「県教委の魅力化補助金は、魅力化できなかったときの手切れ金ではないか」というようなことは、当然、意識していました。

だから危機感を持っていました。魅力化事業の対象校に、遅れて参加した高校がありますよね。

——ありますね。

齋藤…そういう不審な気持ちがあつて、すぐには「参加します」ということにならなかったんじゃないかと思うんです。吉賀高校もですし、津和野高校も、「とにかく、不安はあるけれども、お金を出していただけるといことは、とてもありがたいことだから、魅力化に向かってやってみよう」と始まったんです。

その魅力化の取り組みの一つというのが、東京研修であつたり、聞き書きやアントレプレナーシップ教育であつたりしました。当時、現校長の前任の熊谷校長が教頭でおいりました。教頭と教務主任の二人が中心になって、魅力化のプログラムを立案していました。

——当時、ほかの先生方というのは、「魅力化って何だ？」というような理解とか、魅力化への協力とかはどうだったでしょう？

齋藤…「魅力化って何だろう？」って思いは、それはあつたと思うんですけども、ご承知のように、熊谷先生っていうのは勢いのある人ですよ。大きな声でパッパッパッパッって言うんで、「あ、だったら、いいことなんだろう」と、皆さん、そういうふうには巻き込まれてる雰囲気がありました。協力しないとか、そういう雰囲気はありませんでした。

先生方は、教科のことなどは自分が知っていることだからいいんですけども、魅力化で新しいことをやらなきゃいけないので、負担感は

あったと思います。けれど、私は、直接、「やりませんよ」という声を聞いたことはないです。

——従来の教科指導や進路指導と高校魅力化の考え方の違いで、混乱が起きることはなかったですか？

齋藤・魅力化の取り組みは、総合学習の時間が中心で、あとは行事的なことがあります。実際の授業の中で、いろんなことがどんどん変わっていったわけではないです。その総合学習のところは、コーディネーターが中心に、教頭と、さっき言った教務主任と三人で、実際のところ回しているところが多分にありました。もちろん、担任、副担任は関わりますが、「困ります」とか、「反対します」とか、そういうことはなかったですね。そのように私は受け止めています。

2 従来の教育目標と魅力化の教育目標の調整

——次へ進ませていただきます。

従来の高校教育の目標と、吉賀高校の高校魅力化の目標との調整をなさったのは、どなたがどんなふう調整なさっていたのでしょうか？ 反対はしないまでも、「忙しいから嫌だ」とか、そういう考え方もあると思います。

齋藤・私自身が調整したという認識はあんまりありません。当時、アクティブラーニングということが言われていて、知識の詰め込みではない教育が必要なんだという動きがありました。吉賀高校の魅力化でや

り始めている、地域へ出かけていっているいろいろなことを学び、そこで考えたことを発表する、プレゼンテーションする、といったことは、高校教育の目標から外れているという意識はありませんでした。

吉賀高校の生徒の多くは、学力はそれほど高くなく、学習意欲も高くないので、この魅力化の動きを通して、学習動機が生まれて、学習意欲が高まるとよいという思いで取り組みました。でも、そんなに簡単な話ではないですね。

——「どのように魅力化を考えるか」について、他校の例で申し訳ないですが。横田高校とかだと、「中山間地域の進学校の限界を感じ始めた先生方が、だんだんカンパニーを始めた」と言うような話だったんですね。

その他の高校でも「こういうのをやると、不登校が減るし、学校適応もみんなできるようになる」というのを感じ始めていて、高校魅力化募集以前の取り組みの段階から、そういう効果があったというお話を伺いました。

当時、齋藤先生は魅力化をどういうふうに受け止められていましたか？

齋藤・一番は、「この高校がなくなるんじゃないか」という思いです。この地域は、横田高校がある地域よりもっと早く、子どもたちの数が減っていくだろうという予測が出ていました。この地域には、津和野高校があり、吉賀高校があり、さらに益田には四校も高校があるという状況です。普通に考えると、まず、一学年一学級の吉賀高校がなくなるだろうと思います。その思いがあったので、横田高校のように、



「従来のことをやってきて、それに限界があるから新しい方向を」というよりも、とにかく、良いことは何でもやって、吉賀高校の存在価値をアピールしなくては、という思いでした。東京へ行くこともそうですが、キャリア教育をやるにしても、子どもたちが地域の中に出て行っているような活動する姿を見てもらいたい、そういう思いです。一方で、吉賀町は、通学の支援など、吉賀高校へ入学することで得られる経済的なメリットも整えて下さいました。

——あと、雰囲気的にもしんどい時期があったと思うんですね。

齋藤…三〇年くらい前に吉賀高校に勤めていた教員から聞いたことがあります。教室を開けたらストーブの周りでたくさん生徒たちがたばこを吸っていたことがあった。また、土曜日の午後になると、校門の前に車がズラッと並んでいて、女の子がそれに乗ってどんどん出ていったとか、そういうようなことも聞きました。また、これは地域の方から聞いたことですが、体育祭ではデコレーションを作りますね。それに火をつけた子がいたとか。とにかく、当時の話を聞いていると本当に大変だっただろうと思います。

吉賀高校の生徒は、周りの状況を見ず、臆さず、感情をストレートに行動に表すようなところがあります。

私が出たときに、外国人が来たことがあるんです。交流事業に応募したんです。「魅力化のために、いいことで目立つことは何でもやろう」と応募しました。体育館に二〇人くらいの外国人と生徒が集まって、自由に話しをする時間があったのですが、吉賀高校の生徒は、外国人と話すときも全然臆しません。終わったときに、「いやあ、楽しかった。

先生、私、メルアド交換した」って言うんですよ。中には英会話がおぼつかない子もいて、どうやってコミュニケーションができたのだろうと思いました。そういう物怖じしない、大胆さがあります。

昔の荒れている時期は、そうした面が悪い方にストレートに出たんじゃないかと思えます。ここは、本当に、ある意味で遠慮がないような気がします。逆に言ったら、それが良い面でもあります。さつき言った外国人との交流もそうですが、益田在住の写真の専門の人が、「吉賀の子の写真は面白い」って言うんですよ。ここの子は、ストレートに、感性で、ぱつと撮ると思うんですね。頭の中で、「こういう角度で、こう撮ったら、こうなるんじゃないか」とか考えすぎない、そういうことにとらわれない子どもだなというふうに感じます。

3 高校魅力化の目標とモデル

——先生が、この学校の魅力化の取り組みを行うときに、これまでのどの経験が役に立ったでしょうか？

齋藤…一番は、それはやっぱり隠岐島前高校です。私は島前高校に入っていますけども、隠岐島前高校の先生に、津和野ですが、ここにも度々来てもらっています。具体的に取り組み内容が参考になったというところもありますが、励まされたというか、「やっていることは間違いないんだ」と言うことを感ずることがとても多かったです。隠岐島前高校のコーディネーターの岩本悠さんは、私よりもはるかに年が若いですけど、発想が私にはないものがあり、私には無理な発想がどんどん出てくると感じました。島根県にとって、他の学校にとっても、

とても大きかったですよね。島根県の魅力化は成功したと思えますが、隠岐島前高校の取り組みがなかったら、多分、こうはなっていないと思いますね。

あと、飯南高校にも行かしてもらいました。教育長と一緒に行って、いろんな取り組みのことを聞いて、参考になりました。ここでは、具体的にやつとられることを参考にさせてもらったというのが多いです。

——当時の飯南高校は、飯塚校長先生ですか。

齋藤…心よく、親切にいろんなことを教えてくれました。当時は、飯南町の方が、吉賀町よりは魅力化に対する理解が進んでいました。

4 荒れていた時代とめざす生徒像

——それでは、続いて、先生の時代の吉賀高校についてお伺いしたいんですけども。まず、当時の吉賀高校が目指す高校生象、理念の部分と具体的な資質や能力・進路・意識・行動など、特徴的なところをお伺いしたいと思います。

齋藤…もちろん、教育目標や目指す生徒象は定めていましたが、学校を離れた今、正確な文言は頭にのぼってきません。校訓の「至誠・創造・努力」を教室に掲げたことを覚えています。また、職員会議や全校集会で、努力すること、他者を大切にすることなどを話したと思います。特徴的なものではありません。

これまでの話しておわかりただけたかもしれませんが、当時の

私は、教育的な理念を考えるよりも危機感の方が強く、「吉賀高校は走り続けなければ倒れる」、いわば自転車操業的な意識が強かったと思います。一方で、さっき言ったように、生徒指導上のいろんな問題もありました。そうした中でやっていって、だんだん落ち着いてきたときに、魅力化の中でいろいろとやってきていることを、最近言われている「学ぶ意欲」、文科省の言う「学ぼうとする力」につなげたいと考えていました。最初は、「やること自体が目的」「意欲的に見えることをとにかくやろう」で始まったんですけども、いつまでもそれで続けはさすがないので、「次は、それが学ぶ意欲につながるような仕組みを作らなきゃいけない、総合学習でいろいろな地域と連携した学習したことが、教科の学習意欲につながるようにしなきゃいけないんじゃないか」と、私は思っていました。先生方も、そういうことは意識されていたと思います。

吉賀高校の生徒の学力は、ほんとうに多様で、中にはセンター試験で七〇〇点台をとった子だとか、推薦ではなくて一般受験で国立大学に合格していく子だとか、多くはないけれど、そういう子もいます。かたや、数学でいうと九九も怪しい生徒もいます。こういう非常に多様な生徒みんなの資質を高めることが、吉賀高校の使命です。魅力化の中でやっていることは、そういう目的に沿っていると考えていました。特にコミュニケーション能力が高まっている姿は、何度も目にしました。

——それでは次の質問です。当時のそういった生徒さんを指導する上で、あるいは「学力につなげたい」というようなことをする上で、先生の目から見た吉賀高校生の課題はどのようでしたか。

齋藤・課題は、やはり家庭学習の習慣が身につけていない生徒が多いことですね。「学習につなげたい」と思うのは、裏返して言えば、「家でそれほど勉強できていない」ということです。PTAの会で保護者さんと話しても、「家で、そりゃうちの子、勉強すりゃあせん」って言う方が多かったですね。

——そういった状況に対して、高校魅力化が、生徒さんの学力向上とか学習意欲にうまい具合に影響を与えましたでしょうか？

齋藤・私の退職から四年が経った今、非常勤講師として再び高校に来ていますが、荒れたような雰囲気は全くなく、全体的に落ち着いて学習に向かっているなという印象を受けます。中にとっても優れた子がいますね。この前見せてもらった地方紙の切り抜きの中に、「ヤングこだま」という投稿欄に吉賀高校の何人かの生徒の文章が載っていました。読んで驚きました。とつてもすごい、文章がとても知的で、内容は「三年だからやがてこの地を離れるけども、自分がいなくなってしまうらうか」みたいな、別にとりよめのないことなんですけども、文章がとても知的です。

——あらかじめ、私たちが想定していたのは、当時は、高校魅力化にワーツと向かっていって、高校魅力化を通して、この高校がどんどん変わっていく。あるいは、学校の教育が変わっていくというような、そんな図式が頭の中にあっただんですけども。必ずしも、そういうことではなかったということでしょうか？

齋藤…変わっていくのは、変わっていったんだと思います。

荒れてた時代というのは、生徒たちは、自分たちは地域から、「吉高生は、勉強がでん、やれん子だ」と見られていると思っていたんじゃないでしょうか。それが、魅力化の取り組みの中で、地域に出かけて地域の人の前で発表し、新聞にも取り上げてもらったりするなど、注目してもらえようになったんですね。生徒は地域に出かけたとき、決してひどいことをいわれることはなくて、むしろ、褒めていただくことが多いのです。そうしたことから、自己肯定感が高まっていったと思います。

荒れていた時代は、多分、自分が吉高高校生っていうことにプライドが持てない人が多かったんだろうと思います。コーディネーターのAさんに、「吉高高校の同窓会をやるうと言ったら、拒否する人がいる」と聞いたことがあります。

そういう雰囲気は、私が来る前からいろいろな方の努力で少しずつ変わっていったと聞いていますが、私がおる間にもさらに変わってきたなと思いますね。まだ、プライドを持つまではいってないかもしれませんが、普通に、素直に、吉高高校の生徒であることを受け止めていると思います。

——私たちの実感として、高校生は荒れているという感じもしなかったです。それから、そんなに自分を卑下しているようにも見えなかったですね。

齋藤…そう思います。さっき言った、来た年の二年生はいろいろなこ



とがりましたが、あの学年は特殊でしたね。担任の先生は苦勞されました。

5 着任時の高校魅力化の取り組み

(聞き書き、アントレプレナーシップ教育、地域クラブ)

——それでは、先生が、着任された最初の年に、高校魅力化という意識でなされた授業、あるいは、行事というのは、どんな内容のものがあったのでしょうか？

齋藤…私が来て新しく、ということですかね？

——はい。

齋藤…今も続いているアントレプレナーシップ教育は、その年が初めてです。吉賀町の活性化のためにどんなことをしたらよいかということとを、地域に出かけて学び、活性化策を考え、プレゼンテーションするというものです。途中、何度か地域の方に来ていただいて、指導してもらいました。

そして、聞き書きやアントレプレナーシップ教育の本身は、年によって少しずつ変わりました。「去年聞き書きをやったから、今年も同じようにやるんだ」というような気持ちでは、こういう形の授業は駄目になる」と考えていました。直接生徒を指導する教員が、去年のノウハウを見て、「こうしてやればいいんだな」と授業をこなしていったら駄目になると思います。先生方もそれは思っていて、「やるんだしたら、実

際に担当する自分が納得いくような形でやりたい」という気持ちを感じました。

ある学年のときには、進学を目指す子にもつながるような内容にしたいという申し出がありました。つながるといえるのは、受験勉強という意味じゃないです。例えば、将来看護師になる希望の生徒は、医療機関に出かけて、いろいろな問題を聞くというふうなことです。

それと、大きなことは、東京研修の本身の変更です。東京で東大を見るプログラムがあったのです。私も着任の年に東大へ行ったのですが、「ちよつとどうかな」という思いをもっていたところ、樋田先生にお目にかかり、学生さんにお互いの生活を紹介し合ったり青山学院大学を案内していただいたりする形に変えていただきました。次の年からは、学生さんに生徒の発表を聞いていただき、そのことについて話し合うというようになりました。いいものになって、本当に感謝しています。

——このアントレプレナーシップ教育を始めたということ、あるいは、大学生との交流を始めたということは、先生の目から見ると、どのような効果があったのでしょうか？

齋藤…大学生との話の中で、子どもたちが認めてもらう雰囲気がありましたですよ。私、本当に感謝しているんです。あとで、感想を見ると、「目が輝いていた」とか、大学生がそういうことを書いていました。そういうことが、生徒の自己肯定感の向上とか、地域を誇りに思うこととか、人生を肯定的に考えることとか、いろんなことにつながったと思います。「じゃあ、家に帰っての勉強時間が増えたのかどうか」つ

てのは、まだ、そう簡単にはいかないですけども。

アントレプレナーシップにしても、地域の人の前で発表しますので、ここでもやっぱり、「自分は認めてもらった」と思っています。当時の教員の中に、プレゼンテーションの指導がとても上手だった先生もいました。二人でただ喋るんじゃなくて、演劇のような感じを取り入れた発表したグループがありました。会場でも好評でした。それが子どもたちの自信につながっていったと思います。

——当時、私たちの方に、浅田君という学生がいて、彼は一人でこちへ来たりしたことが思い出されます。

齋藤…ありがとうございます。

——こちらこそ、大学生が高校生と本当に親しくさしていただきました。そういう交流が、高校生にとっても嬉しかったということでしょうか。

齋藤…嬉しかったと思いますね。「駅伝でも全国的に有名な、あの青山学院大学の学生さんが、自分たちに注目してくれて、いろんな話をしてくれる」ということは、彼らにとっても大きいと思います。

6 吉賀町と地域の支援

——当時の取り組みをするための、人とか財政とか行政・コミュニティからの、支援の状況というのはいかがだったでしょうか？

齋藤…人の面では、吉賀町がコーディネーターを配置してくれていますよね。それが、やっぱり、とても大きいです、いろんな意味で。AコーディネーターもBさんも、どちらもとても大きな仕事をしています。吉賀町は教育委員会や企画課を通して、いろんな形で応援してくれました。例えば、町のイベントに高校生の出番を作ってくれたりとか、細かいことまで配慮して下さいました。

それから、地域もです。オープンキャンパスのときなどに柿木に行ったりすると、有機農業をしている人たちが、有機の食材で食事を作ってくれたりとか。いろんな応援をいただきました。

お金の面では、県が通常の管理運営費とは別に決まった額を補助してくれて、とてもありがたく思いました。その上に、町がたかさんのお金を出してくれるようになりました。路線バスの運賃補助とか、部活の帰りなど路線バスがない時間帯に特別にバスを運行してくれたりとか。これらは今も続いています。

一番大きいのは、寮のように利用させてもらっているサクラマス交流センターができたことですよね。これも、当時から見ると、本当に、よくお金を出して下さいました。

——「寮がない問題」ってというのは当時からあったのでしょうか。

齋藤…あったですね。当時、この会議室で、地域の吉賀高校応援隊（二〇一三（平成二五）年発足）の会議が何度も行われました。行政とは別の民間の有志の会です。「何をしなきゃいけないか」「っていうこと、寮を作らなきゃいけない」、「公営塾を作らなきゃいけない」、「隠

岐島前高校がやっているような体験ツアーをしなきゃいけない」、「広報をもっともっとするために、吉賀高校を紹介するDVDを作ったりすることもしなきゃいけない」と話したことを思い出します。

「いろんなアイデアが出ましたが、ツアー以外は、ほぼ実現しました。応援隊も学校も、お金はもっていないので、町が実現してくれたことは、とてもありがたいです。当時の中谷町長は、本当に感謝しています。」

——岩本町長の前の町長さんですね？

齋藤：はい、中谷町長ですね。

——サクラマス交流センターができたのは何年でしたでしょうか？先生がいらつしやるときに計画がスタートした？

齋藤：寮を整備しようという話はありませんでした。私がいる頃は、吉賀高校の寮か、六日市のある旅館を改修しようというような段階でしたけれども。私が退職して一年目くらいじゃないでしょうか、話が「もうできそうだ」というふうに変わっていったと思います。

——やっぱり、陳情し続けるものなんですか？つまり、「継続が力なり」なんですか？

齋藤：多分、私が知らないところでも、いろんな方が「やっぱり町内に高校がなきゃいけない」というふうにいる、高校の存在意義の理解が浸透して、議会が通るようになったんでしょう。私が来た年には、

議会が通らなかつたかもしれないね。「なぜ、吉賀高校のために、町がそんなにお金を出すのか」という人が多かつたでしょう。

——確かに当時、そういう話、私たちも聞きました。

齋藤：ええ、そうだと思います。

——その辺の、「吉賀高校を応援してやろう」みたいな機運が盛り上がったきた潮目になったのは、どんなことがあつたんでしょうか？

齋藤：隠岐島前高校の場合は、わかりやすいんですけどね。ヒトツナギツアーが全国的な賞をもらったことが大きかつたと本に書いてありました。吉賀高校では、何か特別な出来事はなく、何がきっかけだったのかはよくわかりません。

さつき言いましたように、立て続けに良いことで目立つことがいっぱいありました。高校のことではありませんが、人工芝の町営サッカーグラウンドができました。オープンときは、全国の常連の立正大学 湊南高校や米子北高校、また、サンフレッチェのユースも来てゲームをしました。吉賀高校サッカー部も試合をさせてもらいました。

それから、環境教育の全国的な組織があつて、当時の環境担当の非常勤講師の尽力で、全国環境サミットを吉賀高校と吉賀町で行いました。

また、昨日のようなアントレプレナーシップの発表会も、以前はなかつたものです。町の方もたくさん見に来てくれます。いろいろな形で、いいほうで理解が進んだと思います。

そして、吉賀高校のことではありませんが、隠岐島前高校の取り組みがテレビで何度も放送されました。多分、町の人もテレビを見て、「ああそうなのか。町に高校があることはやっぱり大事なんじゃないか」という理解が、進んでいったんじゃないかと思います。

——どっかの段階で、「高校が必要だ」ということ、「自分たちが応援したら、高校がどんどん改善していけるだろう」という、そういう予感や確信みたいなものが広がっていったということでしょうか？

齋藤…だと思えますね。

それと、中高一貫教育をしているので、町内の中学校と常に話が出てきていることもあると思います。生徒指導上の問題があったときには、中学校にも迷惑をかけたこともありました。しかし、「じゃあ、吉賀高校の応援はできません」ということはありません。そういう人間関係ができていくことも大きかったと思います。

中高一貫教育に関する人試制度を変えたですよ。四〇人全員が中高一貫教育に係る特別選抜の定員だったのを二〇人にして、残りの二〇人は町外からも受験できるようにしました。そのアイデアは、熊谷教頭が中学校の先生と話をして出てきたものです。中学校側もその方がいい、「吉賀高校を希望すれば、何もせんでもいける」というのは良くない、定員が減ると特別選抜で不合格になる可能性が出てくるが、そのことが、子どもの努力しなければいけないという気持ちにつながるだろう、ということ。地域の理解も「ああ、まるつきり努力しない子は、吉賀高校も不合格になるんだ」というように、変わってきていると思います。

7 学習の評価方法・取り組みの評価方法

——ちよつと観点が変わるんですけど。評価についてなんですけども。

高校魅力化という、授業自体の評価もありますし。それから、この高校が目指している生徒の学びというのが、どれだけ高校魅力化の関係でいうところの、これは総合ですから五段階評価ではなくなるわけですよ。

——どういう評価、まず、生徒さんを評価するときに、どういう評価基準を使われましたでしょうか？

齋藤…基本的には、文章評価です。私の記憶では、当時、二段階くらいでの基準でした。「非常に熱心に取り組んだ」のようなものと、「少し課題がある」のようなもので、その評価のための資料を集めるくらいのことをやっていました。生徒の評価はその程度のことだったです。「特別に素晴らしい」というようなものを設けて、五段階にするとこういうようなことはなかったです。

逆に、われわれの取り組みの評価は、いわゆる学校評価アンケートを用いました。生徒、保護者、それから、地域の人にも、中学校にもお願いしました。中高一貫教育をしている地域ですので、やっていることに対して、どういう捉えられ方をされているかということを探ねて、振り返りながらやっているという状況でした。

——あるいは、中高一貫ですから、「中学校側から注文する、あるいは、感謝をするようなかたちで、取り組みに対する評価がくる」というこ

ともあったんでしょうか？

齋藤：肯定的に捉えて下さる評価もありましたけど、否定的なものもありました。吉賀高校にそこまで子どもたちを向かわせたいわけではない教員もいます。赴任した最初の頃は、「町内だから、仕方なく付き合っている」という意識がうかがえるような意見も目にしました。

——これ、先ほど聞いたことと重なると思うんですけど、先生の見たところでは、吉賀高校や吉賀高校生は、どのように変わってきたでしょうか？

齋藤：非常勤講師として、四月に久しぶりに来させてもらって、子どもたちが落ち着いていると感じました。全体としての雰囲気です。確かに、学びに向かっている雰囲気を感じます。そうでない子もたくさんいるだろうとは思いますが。

非常勤を勤め始めた頃、「すっかり普通の学校になったね」って言っただんです。「普通の」というのは変ですけども、私がいたときの、なんとなく不満があるような表情の生徒を見かけません。もつとも、私には生徒指導上の問題があった学年のイメージが強いのかもしれませんが。今は、そういうものはほとんど感じません。見るとですね。

8 吉賀高校応援隊―自主的な地域学校協働の組織と行政の対応―

——それでは、また、当時のことを振り返っていただきたいんですけど、今、「コンソーシアム」ってどういう言い方をするんですけども。当時のコ



ンソーシアムの状況、コンソーシアムというものになっていなかったかもしれないけども。地域のいろいろな組織との関係、先ほど、プロジェクト会ですか？の話が出ましたけども。どんな外部の組織とのつながりがあったでしょうか？

齋藤・プロジェクト会は、吉賀町と吉賀高校との会議で、町の教育委員会に、あとから企画課と産業課も加わりました。県教委の指示は、魅力化事業は、地元の行政と一緒に取り組むようにというものでした。お金が動くことにつながる会でしたので、とても有効に機能したと思っています。今も続いていて、よく続いているなと思います。

あと、中高一貫教育の会合が年間一〇回近くありました。これは、中学校の先生方との信頼関係を築く上で、とってもいい会だったと思います。

—— それでは、あと少しだけお願いします。

当時、コンソーシアム、あるいは、学校外の組織としては、そのプロジェクト会、あるいは、中高一貫教育の会があったようなんですけども。これを、効果的に運営するためのポイントというのは、どのようなものがあったでしょうか？

齋藤・基本的には、高校が中学校側に対しても、町に対しても、お願する立場でしたので、高校側が、具体的に会のねらいというか、そういうものがしっかりしてないと、うまくいかなかっただろうと思います。教頭を中心に、いろんなことをよく詰めて進んでたと思います。

公でない組織では、吉賀高校後援会がありました。同窓会や自治会、

町内のいろいろな団体の長などがメンバーで、年に一回総会がありました。吉賀高校の問題を町全体で考える場でした。

高校外の組織でいうと、もう一つ、応援隊というのがありましたね。この組織は、町との関係が難しくなりましたので、なかなかやりにくい面はありましたけども。ただ、住民の直の声、必ずしも町役場には行かない住民のいろんな気持ちとか、情報とかを吸い上げておられる人たちだったと思います。例えば、県外入試の最初の年に、県外の子に対しては、どっかに下宿をお願いしなきゃいけないですよ。そのときに、われわれ教員はわかりませんが、「あそこだったら受けてくれるかもしれないよ」とか、いろいろなかたちで助けていただきました。その人たちが、「いろいろあるけども、そりゃ吉賀高校へ行かせんさいや」って言うってくれるのと、「あんなどこ行かしちゃだめだ」って言うのと、全然違うと思います。そういう場があったと思います。

応援隊は、個性が強い、言葉が激しい方が多かったので、こちらが主導というより、その方たちが主導でした。私たちは、呼ばれて行っているというふうな状態でした。

私の在任中の終わり頃になると、応援隊と町とはかなり険悪な関係になっていくように感じました。間では、町長選もあり、他にもいろいろな対立があったりしたので、感情的に難しかったですね。しかし、今思うと、応援隊の人が言ったことが実現していますよね。これがすごいなと思いますね。

—— 吉賀町らしさですね。

齋藤・吉賀町は、あれだけ激しい言葉の応酬もあったのに、すごいな

と思います。

——当時はコーディネーターというような発想はまだ、定着してない時代だったと思うんですけども。校長先生の中では、コーディネーターの役割とか、高校の中での位置づけを、どのように考えていらっしゃるのでしょうか？

齋藤…基本的に教員は教科で採用されていますので、まず、教科のこと、それから生徒のことが中心です。新しいアントレプレナーシップのような授業をしていくためには、町内との交渉とか、いろんなことが必要になります。そうしたことを前面になってやっていただいたです。あるいは、デマンドバスのことなど、町の支援の窓口とか、そういったことをやっていただきました。そういうことをお願いしてたというふうに思っています。

——そういう意味では、町との関係が深い坂田さんを、コーディネーターとしてお願いしたというのは、意味があったということでしょうか。

齋藤…はい、ちょうど応募されて、よかったです、とってもですね。

9 苦労とか、あるいは、面白かった点

——それでは、あと少しですので、申し訳ありません。

高校魅力化を当時、なさっていくうえでの苦労とか、あるいは、面白かつ

た点。

齋藤…私、ここへ住めば良かったんですけども、住宅は借りていましたが、横田の家から通っていました。応援隊の会議などがあると夜遅くなります。それから、いろんなことをお願いしているの、町の行事とかで声かけしてもらったら、できるだけ行くようにしていました。土日も関係なく。小中学校の学習発表会とか、あるいは、ある地区でこういうイベントがあるよと言われれば、とにかく行かしてもらおうようにしてました。それが、苦労と言えば苦労かも。勉強にはなつたんですけども。ただ、時間を相当使ったのは間違いないです。

しかし、やっぱり苦労の一番は、応援隊と町との間に挟まって、とってもとっても心痛したことですかね。立ち位置って難しかったですね。

——自販機とか、もめましたね。

齋藤…自販機、そうですね。

私がいたときに、応援隊の人たちが業者にお願いして設置し、町内の人に「吉賀高校を応援する意味で、この自販機を使ってほしい。売り上げの一部を高校の支援に使うから」「応援ステッカーのついた自販機を置くだけでも、応援の意味がある」と始まったものです。

私の理解では、高校にお金をといるのではなく、例えば、「高校を応援するための看板とか、垂れ幕をつくるとか、そういうようなことをする」というふうに聞いていたんですが。その後、高校との関係が変わってきたのかなと思っています。



——面白かったところとか、興味深かったところとかは？

齋藤…すべてがとても面白かったです。この魅力化に関することは、とても。私は、教員生活の最後に、津和野高校と吉賀高校に勤めさせてもらって、とっても良かったと思っています。勉強になりました、本当に。

「学校がなくなるかどうか」という状況なので、「じゃあ、学校の役割は何だろうか」、「本当になくなったら困るのか」とか、「この状況で、学校は何をしなきゃいけないのか」とか、続くのが前提の学校とはちよつと違うことを、いろいろと考えさせてもらったことが、とても良かったです。

こうやって、皆さんとも知り合いになれたし、いろんな方に会うこともできました。

——そうですね。私たちも、本当にいろんなものをいただいたと思っています。

齋藤…いえいえ、とんでもありません。ありがとうございます。

——あとは、先生の方から自由に高校魅力化を振り返っていただけますか。

齋藤…さつきと同じことになりますが、私にとっては良かったということしかないですね。いろんな意味の勉強ができました。

私は、進学校も長かったです。進学校は、受験を目標にしたとは言

いませんけど、結局、進学実績を求められているところがあるので、模擬試験の成績を気にします。また、クラス間で進度をそろえて授業をしますので、「この子まだわかつとらんのじゃないかな」と思いながらも、先へ進まなきゃいけないです。

ここでは、そういった世界とは全然違って、「この子のためにどうしたらええか」に集中することができます。また、人数が少ないです。で、たったこれだけしかない子どもを、「わかってないけどこの子はええわ」とか、そんなことはあり得ないですよ。これが、一クラス四〇人おれば、授業中下を向いたりする子がいて、「あの子、集中してないな」とか思っても、それを全部気にしていたら、いつもそういう子を気にかけてやっていたら、授業ができないです。それで、いつの間にかそういうことに慣れつこになって、自分がつまらん授業、話をしとつても、「あの子は集中力がないな」とか、「あの子、勉強せんな」という感じで過ごしてきた部分がいふんあつたということを感じます。しかし、吉賀高校で魅力化に取り組む中で、もう一回考え直すことが多かったです。

10 インタビュー後のフリーなやりとり

——いろいろな本当に考え深いものがあるんですけども。

魅力化の初期の大変な頃に、先生が赴任されて先生が果たされた役割をいろいろ振り返らせていただきました。

先生、すごくいろいろな方と仲良くされるといふか、すごい根回しといふか、そういうのですごくご苦労されたのではないかなというふうに。

齋藤：はい。私がたまたま性格がそういう性格で、考えとしても、けんかをしたらだめなんです。その時は、いくらこつちが勝つたと思っても、言い負かしたと思っても、人間同士の付き合いは、それではないことにはならない。仲良くならないと、仲良くしていかないと、話が良い方向に向かわないですよ。

ただ、前にも言いましたけど、岩本さん（聞き手注：元隠岐島前高校のコーディネーター、現島根県教育委員会特命監・岩本悠さん）と何回も話しているし、一緒に飲んだりもしています。そういうのがないと、自分だけではできません。外部の視点から「自分のやっていることは間違っていないんだ」、「その方向でいいんですよ」ということがないと辛い。もちろん、樋田先生とのお話もそうですし。

それから、私が本当に運が良かったのは、文科省から何でかわからんけど電話があつて、「キャリア教育でやっていることの実践を発表しなさい」というようなこともありました。そういうことを言っただけでいいことは、やっぱり、「やっていることは間違っていないんだ」と受け止めます。本当に、運が良かったと思います。

——でもやっぱり、それは、先生のうまくいろいろな人と仲良くするとか、いろいろな人と信頼関係を結ぶとか、根回しをするっていうところがあつたから、そういうことが運が引き寄せられた、みたいなそんな感じですよ。

齋藤：なかなかそういうところは、わからんですけど。とてもいい人が、とても努力しても、うまくいかないことがいっぱいありますしね。

—— 県の高校改革担当と吉賀高校との、コミュニケーションの具合って、どんなだったんでしょう？

齋藤・それも、運が良かったことの一つです。担当者とは、私は仲良しなんです。彼が初任の学校に、私が先に勤めていました。その高校、当時大変荒れていて、荒れた学園ドラマの世界みたいな日常を一緒に過ごしました。だから、お互いに人柄はわかっています。吉賀高校のことを、「そういう事情があるんだ」とだんだんわかってもらって、それから、定員を変えることも応援して下さったし、県外募集のことでも配慮してくれました。私がどういう人間かわかっているんですね。そういうことがわかってるといえるのは、とてもありがたいと思います。

—— 遅くまで、今日はありがとうございました。